

ふるさとから始まる平和学習プログラムの作成と実際 ～「戦争体験伝承者」育成のための学びのあり方～

出雲市立荘原小学校 総合学習充実プロジェクトチーム

1 はじめに

「今年は戦後〇年にあたり…」という言葉も70年以上続く中で、戦争体験者が年々減少する現実を目の当たりにし、やがて戦争が実感をもって学ばなくなる日の到来が現実味をもって語られている。戦争体験を後世に引き継いでいくためには、小学校教育においてどのような取組が求められているのだろうか。

2 主題設定の理由

終戦から70年以上が経過し、戦時中の生活体験者の高齢化が年々進行している。終戦の年の国民学校6年生児童も現在は84歳、戦時中の記憶と体験が徐々に失われている現状が進んでいる。このような状況の中で、これまでの10年と今後の10年を比較した時、最も深刻な問題は戦争体験者の喪失という事実である。実感を伴う平和学習の実践継続の点から、小学校教育においてどのような取組が期待されているのか。本主題の「ふるさとから始まる平和学習プログラムの作成と実際」は、児童の日常生活の舞台である地域をフィールドに、ここで生きてきた戦争体験者と児童とが直接向き合い、時間を超えて大切な記憶と願いとをつないでいくための平和学習プログラムの作成と実践の意義を提案しようとするものである。

3 研究の仮説

本単元の指導を構想する際、仮説を次のように設定した。

仮説(1)「顔」が見える平和学習の設計

戦争体験者から直接話を聞く等、「顔」の見える学びの機会を充実させれば、戦争や平和について歴史の現場で事象を自分事としてとらえ、より深い学びにつながるであろう。

- ① 修学旅行における出会いの場の充実
- ② 体験者や歴史の現場との出会いの設定

仮説(2)「思い」を広げる平和学習の設計

戦争や平和に対する自分の考えや思いをまとめ、

積極的に発信する機会を確保すれば、地域住民あがて戦争体験を語り継ぐ学びの体制づくりにつながるであろう。

- ① 平和への願いを発信する機会の設定
- ② N I E活動を活用した積極的な情報発信

仮説(3)「思い」をつなげる平和学習の設計

戦争体験者による体験談の教材化や関連情報のネットワーク化を図れば、ふるさとに根ざした平和学習プログラムを継続的・計画的に実践できるであろう。

- ① 戦争体験者情報の収集ネットワーク構築
- ② 継続実践のための手続きの「見える化」

以下、この仮説にしたがって実践事例をとおして検証していく。

4 研究の実際

(1) 事例1「顔」が見える平和学習の設計事例

① 修学旅行における出会いの場の充実

本校では、毎年6月初旬に広島方面への修学旅行を実施している。修学旅行実施にあたっての事前学習では、広島で生きた人との間接的な出会いを大切にしたい学習を実施している。

太平洋戦争の経緯を大まかに調べまとめる学習と合わせ、児童全員に複数の読み物作品に触れさせ、当時の人々の生活の様子や願いをより具体的につかむ学習を実施した。これにより、児童一人一人が事前調べや広島平和記念公園での見学活動に、次のような目的をもち、意欲的に学ぶことができると考えたからである。

- ・ゲンやすず達が生きた当時の広島の様子を、展示資料などから自分の目で確かめよう

『はだしのゲン』『この世界の片隅に』の作品から

- ・佐々木禎子さんや折免滋さんの願いと祈りを知り、私達も平和への誓いを立てよう

『おりづるの旅』『まっ黒なおべんとう』の作品から

- ・資料館展示品「伸ちゃんの三輪車」を見て父母の思いを考えよう 『伸ちゃんさんりんしゃ』の作品から

また、広島平和記念公園での見学活動には、必ず被

爆体験者による講話を取り入れている。あの日あの時の広島に生活し、原爆投下時の広島の現状を生々しく語る体験者の話は、児童に戦争被害を「固有名詞で語る術」を与える効果的な学習方法であると考えからである。

② 体験者や歴史の現場との出会いの設定

本校が位置する出雲市斐川町内には、太平洋戦争時の史跡や事象が数多く残っている。本実践では、本町に関係の深い代表的な事象について、



【写真① 国民学校の皆さんのお話】

戦争体験者の証言によって学習内容を構成した。戦争末期の斐川町は、戦局悪化による海軍大社基地の建設、それに伴う爆撃機「銀河」の配備や人間爆弾「桜花」の配備計画の進行等、特攻基地としての様相を見せ始めていた。この状況を実際に見聞した終戦当時に国民学校6年生だった児童も84歳（2017年現在）。当時の様子を直接聴取できるのも、体験者の年齢や体力的な条件を考慮すれば、その限界が迫りつつある現状にあると言える。

6月初旬に修学旅行を終え、広島での学びを学習公開日に保護者に向けて報告した児童は、「ふるさと荘原に戦争があった頃について調べよう」の学習に引き続き取り組んだ。この学習を実施するにあたり、下表の方々の協力を得て学習を展開することができた。

区分	出会わせたい事象	対象人物
講話 [1]	・戦時中の荘原の様子 ・海軍大社基地建設の様子 ・軍事施設の様子	池橋 達雄氏 (郷土史家)
見学	・新川鉄橋の機銃掃射痕 ・海軍大社基地跡地 ・魚雷・弾薬庫跡地 ・爆撃機「銀河」格納庫跡地	池橋 達雄氏 (郷土史家) 樋野 達夫氏 (地元在住者)
講話 [2]	○国民学校での生活体験談 ・学校生活の様子 ・衣食住の様子 ・空襲体験	杉原 進良氏 池淵喜久子氏 猿木 ミツ氏 宇賀田 耕氏 勝部 博氏
	荘原村国民学校卒業生 (S6年～9年生まれ)	
	○学童疎開先での体験談	瀬戸 寛治氏

講話 [3]	・ふるさとから疎開先へ	中川 義一氏
	・故郷を遠く離れた疎開生活	中元 登氏
	・卒業式前夜の大阪大空襲	長浜 末子氏 木原 節子氏
大阪市堀江国民学校卒業生 (S8年生まれ)		

当時の国民学校の児童の中には、昭和20年7月28日の山陰空襲の際、川で遊んでいてアメリカ軍戦闘機の機銃掃射を間近で目撃し、橋の下へ逃げ込んで難を逃れた体験者もあった。この話から子どもの命さえ危険にさらされた戦争であったことを



【写真② 海軍大社基地跡地見学】

多くの児童が感じる事ができた。

また、食糧事情の悪さや物資不足の中での遊び等の話も多く児童の印象に残った。戦時中の同世代の子ども達がどのような生活をしていたのか具体的に知り、高い関心をもって現在の生活との比較もできた。

島根県には、昭和19年9月から終戦まで、大阪から3,837人の児童が集団疎開していた。その中で、大阪市西区堀江国民学校の3年生と6年生児童130名が、9月22日の昼頃荘原村に到着。そのほとんどが6年生であった。どのような思いで疎開生活を送っていたのか具体的に調べることは、戦争を子どもの視点から身近にとらえ、感じることでできる活動であると考えた。また、大阪からの疎開児童は卒業のため翌年2月に大阪へ帰り、卒業式前夜に大阪大空襲に遭遇する。大阪北区在住の瀬戸寛治氏もそうし



【写真③ 学童疎開体験者の皆さん】

た体験をもつ一人であった。瀬戸氏との出会いは、まさに奇跡に近いものであった。加えて、氏の同級生の同席も実現し、体験談の聴取を行うことができた。

(2) 事例2「思い」を広げる平和学習の設計事例 ① 平和への願いを発信する機会の設定

学習者の学びをより深いものにするために大切なことは、学習過程において習得した知識や考えを自身の

中で整理し、自分の言葉として表現することである。そして児童による発信活動が、保護者をはじめ広く地域住民に伝えられることにより、地域に残る歴史に光が当てられ、地域全体で地域の歴史を大切にしていこうとする機運の高まりへつながっていくものである。本実践においては、次の手立てによって学びの成果等を地域住民へ発信した。

○ 学習発表会、学習公開日での成果発表

児童の学習後の聞き取り活動をバックアップできるのは、保護者であると考えている。その協力を得るためにも、学習成果を積極的に伝えていくことが重要である。6月の学習公開日での「修学旅行レポート発表」、11月の学習発表会「荘原っ子フェスティバル」における児童劇「斐川にも戦争があった～荘原村の子ども達～」の舞台発表は、すべての聴衆の心を熱くし、子ども達の深い学びに対して高い評価を得た。今年度の児童劇は、新たな学びの場となった「大阪からの学童



疎開児童達の体験」を中心とした劇にまとめた。卒業式の卒業生からのメッセージの中にもセリフの一部が埋め込まれるなど、児童にとって

忘れることのできない貴重な学びの場となった。

○ 平和祈念式典における児童作文発表

出雲市は、毎年8月第一日曜日に市戦没者追悼・平和祈念式典を開催している。式典では、市内小学生代表児童が平和への願いを込めた作文発表を行っている。本年度は、本校児童が作文発表を行う機会を得て、8月6日（日）出雲市民会館において、市内各地区遺族会や小中学校教職員、市民等が集って開催された。その際の平和へのメッセージの一部を紹介したい。

私たちは、今、平和のために自分達にできることは何かを考え続けています。戦争体験を語り継ぐこと「幸せが当たり前」を築いてくださった先人に感謝すること、そして、



【写真⑤ 式典での発表場面】

思いやりをもって支え合うことが、平和の実現につながるという学びを大切にしたいと思います。私たちにできることは、小さなことしかありません。それでも、平和学習を通して出会ったたくさんの皆さんの思いを大切に、まず、自分の周りから、思いやり、支え合うつながりを作っていきたいと思っています。

② N I E活動を活用した積極的な情報発信

本校は、平成28年度からN I E推進協議会からN I E実践校の指定を受け、教育に新聞を取り入れた実践活動を進めている。その取組のひとつに、本校の特色ある教育活動を各報道機関へ積極的に情報提供し、地域住民に向けて広く発信する活動を重視している。

戦争体験の継承では、ひとつの学校の取組だけで成果を上げることなど到底望めない。より多くの教師や児童生徒、地域住民がその必要性を感じ、身近な体験者からの聞き取り活動をまず始めなければ途切れてしまう記憶である。

平成29年9月7日掲載のN I E特集「青春はつらつ新聞」（山陰中央新報）における本校児童からの主要メッセージは、「18日は敬老の日。祖父母から戦争があった頃の話をもみんなで聞こう」である。掲載日を決定するにあたり、読者が身近にいる戦争体験者から聞き取り活動の行動を取るきっかけを考慮して掲載期日を決定した。

実践を進める中で、児童の学びの様子が地域へ広がっていき、講師を依頼した池橋氏へ地区内の多くの団体から「自分たちも地域の戦争の歴史について学びたい。ぜひ講師をお願いできないか。」という依頼が入っていると聞いた。地域の歴史を地域住民が学び、伝えていく契機となればと願っている。

（3）事例3「思い」をつなげる平和学習の設計事例

① 戦争体験者情報の収集ネットワーク構築

戦争体験者の体験談を聞く機会を設定する上で一番の問題点は、体験者に関する情報収集手段である。戦争体験の内容にはつらく悲しい体験を含んでいるものである。また、求める体験者の所在も手がかりがわからずという状況にある。本校では、『荘原歴史物語』の編著者である郷土史家・池端達夫氏の指導のもとで実践を大きく前進させることができた。

また、新聞社との連携も重要である。平成27年6月、読売新聞大阪本社記者から、1本の電話が学校に入った。「戦後70年にあたる今年、学童疎開の記事

を書いている。当時の荘原村国民学校は、現在の小学校の位置と変わりはないか」という問い合わせの電話であった。この1本の電話が後に、荘原村への学童疎開体験者・瀬戸寛治氏とその同級生との出会いを実現させてくれる。

「ふるさと荘原に戦争があった頃のことを調べよう」の指導計画を構想する際、この電話情報を活用しようと考えた。この記者は、学童疎開体験者への取材をもとに記事を書いているはずである。この記者と連絡がとれないか思案していた時、島根県NIE連絡協議会総会で読売新聞松江支局長と出会うことができた。この件に関して協力依頼をしたところ、大阪本社との連絡につながり、瀬戸寛治氏への連絡、当時の特集新聞記事「島根の学童疎開児童たち～大阪・堀江国民学校6年生～」の提供もあり、教材化に向けた事前準備を大きく前進させることができた。

② 継続実践のための手続きの「見える化」

本校の取組は3年目であり、今後も本校の特色ある取組のひとつとして継続発展させていきたい。そのためには、単元指導計画資料以外に、次の関係資料一式をファイルに一元管理保存し、指導者が活用しやすいよう整理しておく必要がある。

○体験者に関する情報

- ・顔写真・氏名・生年月日・住所・電話番号
- ・戦争体験内容（講話可能な体験内容）
- ・ビデオレター資料（学童疎開体験談）

○郷土史家の講話に関する情報

- ・説明資料と講話の映像記録
- ・現地見学時の説明内容記録

○報道関係

- ・実践掲載記事
- ・報道機関連絡先一覧

実践の質を保ちながら継続させていくためには、必要な情報がいつも見えていることが大切である。この「情報の可視化」と「戦争体験の資料化」とが、これからの実践継続のカギになると考えている。

5 研究成果と課題

本実践を終え、ある児童が、「私は、大人も子どもも、大都市も田舎も、日本中の誰もが戦争に巻き込まれたことを実感しました。」というまとめの感想を残した。この言葉は市平和祈念式典の児童代表メッセージの中にも盛り込まれた。それは6年生児童全員の共通の気づきだったからである。様々な立場からの戦争

体験と出会う本実践のねらいは、まさにこの気づきの獲得のためであった。

本実践の中で、多くの戦争体験者と出会い生の声を聞くことが、児童に「もし自分だったら」という歴史の現場に身を置いて考えさせたり、当時と現在との生活を比較して社会の大きな変化や人々の思いに気づかせたりする重要な学習手段であることが確認できた。そして、「自分の役割は何か」について真剣に考えることができたのは、証言者の肉声の持つ説得力にほかならないことも再確認できたことである。

また、本実践をとおして、地域住民の中に「地元に残る戦争体験や戦争遺跡を知ろう」という機運が高まった。これは、児童の学びの様子が家庭で話題になったことや、本実践に関わる新聞記事を目にした人々が自分たちの学びの必要性に気づいたためである。

しかし、実践継続には、諸手続きや依頼先の名簿等のファイル化による実践の再現性を担保することに加えて、戦争体験者のさらなる掘り起こしと体験談のデータ化が重要であることもより明確となった。

6 おわりに

これからの地域社会を支える児童達が、祖父母が体験したつらく悲しい戦争体験を踏まえ、「未来を語り創る者」として、また祖父母の願いを「伝承する者」としての役割を自覚できるような取組を、継続的・計画的に実施していくことが今強く求められている。そのためには、戦争体験者の生々しい体験内容をどのような方法によって保存し、それに基づく実感の伴う実践を積み上げるかが課題である。本実践がこれからの平和学習実践の試案となることを願っている。

【本実践が掲載された新聞記事一覧】

- ①「広島だけでない戦争犠牲」池橋達雄さんから学ぶ
(山陰中央新報 2017.06.27 付)
斐川町内戦争遺跡の社会見学取材記事
- ②「疎開体験者「戦争あかん」～交流の出雲の児童「私が語り継ぐ」～」
(讀賣新聞 2017.08.07 付)
「市戦没者追悼・平和祈念式典」での作文発表取材記事
- ③「NIEのページ」本校の平和学習の特集ページ掲載
(山陰中央新報 2017.09.07 付)
本実践の主たる取組を総合的に紹介した特集記事
- ④「疎開・空襲悲劇 児童が熱演」大阪の体験者から聞き取り
(讀賣新聞 2017.11.15 付)
学習発表会での6年生による児童劇発表の取材記事